

## 雲南印象記および随想

### 中国雲南の旅によせて

松浦 利明

1 .

今回の調査旅行の途次、夕食の卓を囲んでの懇談の席で、今の中国をどう見るかという話題になった。これは発展のなかでの歪みをどう考えるか、あるいは遅れた部分をどう位置づけるかという問題に関わる。現在の中国は世界で最も速いスピードで成長しているから、その点では意見の違いないのだが、問題はその発展の質ないし中身ということになる。進んでいる部門と遅れている部門の両方が併存すること自体は、近代化には普通共通して見られる状況だと思われるが、しかしそれが構造化してしまうと話が違ってくる。構造化するということは、進んだ部門の存在が遅れた部分によって支えられている状況としておく。「先富論」にみられるように、今の中国は発展しやすい所をまず伸ばし、それが遅れた部分を引っ張り、解消するという思考に立っている。私の場合、農業や農村といった遅れた部分が気にかかる習性があり、ややひねくれた全体認識になるきらいがある。確かに発展部分によるプル効果がないとはいえない。都市を中心とした発展は、食料需要の質・量両面における変化という形で、食料生産に跳ね返り、刺激を与える。さらに農村過剰労働力の雇用～その多くは様々な形の兼業や出稼ぎであるが～を通じた所得効果も否定できない。農業や農村も国全体の発展から切り離された存在ではなく、大きく影響されることはいうまでもない。しかし現在のところ、農村・農業・農民問題が大きく解決の方向に向かっているとは思えない。それどころかより一層解決から離れていっているように感じられる。

今回の旅行では、クレーンが林立し躍進の最中にある上海と少数民族が主に住み、さしたる産業もない雲南の農村地域を見る機会に恵まれた。その意味では中国の遅れた地域と逆に先頭を走っている大都市を目にすることができ、とても貴重な体験であった。また石林や玉竜雪山でのツアーでは、中国社会にも大衆ツーリズムの時代が到来しつつあることを実感することができた。

統計を見ても、都市と農村の所得格差は縮小の方向ではなく、むしろ拡大の方向をたどっている。そのことが地方賦課金徴収～これはまた財政制度の不備とも関わるのであるが～とからんで、農村騒動を生んでいる。ただしその地域分布をみると中間地帯である河南省、湖北省、

湖南省といった地域に集中していて、最も遅れた地域ではない。中国社会の歪みは社会・政治体制に強く関わっているよう気がしてならない。そうしたもやもやした気分のなかで、旅行と前後して三冊の書物に出会ったが、いずれも農村、農民の問題を扱ったものである。

2 .

さて3冊の本であるが、杜潤生 『中国農村改革論集』(農林中金総合研究所編 白石和良・菅沼圭輔・浜口義広・阮蔚訳 農文協刊 2002・3 761頁) 清水 美和 『中国農民の反乱～昇竜のアキレス腱』(講談社刊 2002・7 293頁) 何清漣 『中国～現代化の落とし穴～噴火口上の中国』(坂井臣之助・中川友訳 草思社刊 2002・12 436頁)である。

杜潤生の著作は、中国農業現代史の貴重な記録資料である。毛沢東時代から中国農業政策の策定にたずさわり、文革時代には地方へ左遷された後、75年に復活、開放・改革路線の中心になって活躍した彼の論文・講演・報告をまとめたもので、現代中国の農業問題研究にも欠かせない文献であるが、中心は開放・改革路線にあり、ここではその所在を記すだけに止めたい。

次に清水の著書は、新聞社特派員として中国に滞在した際の見聞・調査～主として農村・農民問題に関わる～をまとめたものである。その最初のふたつの章、『「農民領袖」群像』と『「土皇帝」の専横』には、正直強烈なショックを受けた。というのも私の頭には中国共産党の権力基盤はその農民・農村掌握にあるという先入観が強くあったからである。これには学生時代心熱く読んだスメドレーやスノーから多分にきているかもしれない。その伝統的な権力基盤が今や解体の可能性をはらんでいる様子が生々しくルポタージュされていたからである。土皇帝とは農村を私的利益のため半ば暴力的に利用・支配する者達であり、他方農民領袖は様々な形の不当な支配に対する農民の不満を組織し闘う指導者で、両者は共通の基盤から生み出された対立物ということになる。しかも問題は、土皇帝と地方農村の党組織との関係で、ルポは両者が地域現場ではむしろ癒着し、手をたずさえている姿を描きだしている。歴史の流れのなかで、状況が逆になったといえよう。現在、党組織の汚職・腐敗が広範に広がり、その肅正が最大課題になっている状況を見るにつけ、「土皇帝、八路も遠くなりけり」とつぶやくしかない。

ところでこうした「土皇帝」を生み出すメカニズムは何かと問えば、それは地域資源の利用権をめぐる争いである。改革・開放路線は、一方で起業チャンスの口開けであったが、他方では各地域が持つ様々な資源、とりわけ土地の利用の開放でもあった。それはすべて許認可を必要とするが、市場取引で決まるものではなく、権限を持つ機関の決定であり、結局はそうした機関の特定ポストを占める党要人の権限である。よく中国はまだ「法治」でなく「人治」といわれる所以は、この種の決定が法によらず、人の判断によっていることを指している。しかもこの種の決定は、事業を起すサイドにとっては大きな経済的意味をもつから、いやでも金銭

的価値を帯び、利権化する。許認可が取引価値を持ち、官僚汚職の源になるのは、日本の場合でも日常的に観察され、何も中国だけのケースではない。問題はそうした事態をきちんとチェックする機構が存在し、適切に機能するかどうかである。この点で中国の行政組織の透明性と公正さはどう判断したらよいのだろうか。一党のデイクテイターシップがプラスに作用するとは思えないし、清風と査察の強化で抑えきれぬわけでもない。清水の本のタイトルは少々大仰だが、ジャーナリストとしての確かな目と中国についての知見の蓄積が窺える優れたルポタージュだと思う。

### 3.

何清漣の「中国的陥穽」は中国では発行を差し止められてしまった書物である。1998年に北京で出版、300万部以上も販売されたベストセラーとなったが、その後著者の発表した論文が当局の忌避にふれ、結局本書も発禁となり、本人も亡命を余儀なくされた。内容的には学術書といってよく、為にする意図で書かれたものとは思えない。ただ現在の中国政府の採っている政策については極めて批判的であり、舌鋒は鋭い。しかし外部にいる者の目からすると、反感を持つような種類の批判ではない。本書が取り上げている問題は、株式制、開発用地囲込み、国有企業、人口問題、失業、犯罪、地方マフィアと黒社会等現代中国が抱えているマイナス現象とその原因である。その中で農村と関係のある部分は、8章「人口問題・失業・犯罪」、9章「農村社会の変化と地方マフィア勢力の台頭」、11章「社会構造についての総体的分析」で、この11章は後から追加され、発禁の原因になったとされる。

この本のキーコンセプトは、開放・改革を中国の原蓄プロセスと捉え、それ以前の一元的社会体制から多元的な体制への変化とみる。ここでの原蓄概念は必ずしも資本論のそれとは一致しないが、市場経済に向けてスタートする資本の創出といった意味である。その過程が権力＝資源利用の決定権限の市場化であり、利権の構造化となる。この過程から形成されてきた経済的エリート層として、社会資源の管理者、国営企業の責任者、官と商を結びつける仲介者に加え、経済チャンスを利用する個人資本家が挙げられている。前の三者が旧体制の体質を強く残しているのに対し、最後のカテゴリーは生産活動と関わっていて新しい要素(新興ブルジョワ)である。しかし中国社会の変化の中心は、旧体制の変態であり、これが改革・開放の本質とみている。少数者への富の集中の対極に、疎外された大衆と社会の腐敗を置くという、相当にペシミステックな社会像が展開されている。「始めに悪ありき」の論法で、専ら始原(原蓄)の不法が中心に据えられており、その限りでは明解であり、説得力を持っている。

しかしこうして始まった市場経済化が、始原の問題性を突破し、変わっていくという弁証法(「悪を欲して善をなす」)は成り立たないのであろうか。旧体制的要素と新しい要素の対抗と

いう構図は描けないのだろうか。社会の動きというのは、それほど胎内での姿に規定されてしまうのだろうか。ここではウエバーの厳しい資本主義形成の倫理や戦前の日本資本主義の本質規定をめぐる議論が想起される。

農村問題との関連では、農村を掌握していた旧体制がその力を失い始め、それに代わって地域マフィアが伸びてきているという構図が指摘されているが、この指摘は先の清水のルポタージュにも引き継がれている。清水の書の参考文献リストに何の著書も挙げられているので、両者には何らかの関連があるのかもしれない。いずれにしても問題は地域農村の支配の構造であり、その揺らぎであるといつてよいだろう。現在、党员資格の拡大、すなわち企業家層の党への取込が実現しつつあるが、これもよりマクロなレベルでの支配の構造の変化を象徴しているといえなくはない。

#### 4 .

高原に菜の花畑が広がる雲南・麗江の旅は、北京や上海といった物凄い喧騒の世界と異なつて、のどかな、しばし浮き世の憂を忘れさせてくれる趣があった。勿論、一步踏み込めば田舎にも厳しい現実があるに違いない。観光客のおとすなにがしかの金に、市場経済化に生きるすべを託す少数民族の村々ひとつとっても。

それにしても今回の旅は、中国の人材の層の厚さの一端を知る機会となった。雲南・麗江で通訳にあたって下さった若い二人、一人はその健気なさに、一人はその抑制された賢さに強く心を打たれた。開放・改革がこうした芽も育んでいることを思うと、これからの中国への関心がまた湧いてくるのである。